兵庫南部地震

三億円目標に勧募

三月定宗　寺院復興計画を提案

浄土宗

浄土宗（成田有恒宗務総長）では二十六日、内局会議及び庁内の地震対策会議を開き、十七日に発生した兵庫県南部地震への救援対策について協議、総額三億円を目標に災害救援義捐金の募金活動を展開するなどの救援策を決めた。

同宗では、十七日発生した兵庫県南部地震で灘組の伊藤省三住職が倒壊した建物の下敷きになり死亡したのを初め、神戸組、灘組、武崎組、伊丹組、摂陽東組、大阪教区の一部などを中心に多くの寺院で本堂全壊、半壊、庫裡崩壊、山門崩壊などの被害に見舞われ、檀信徒にも多くの死亡者が出ている。

同宗では、地震発生の翌十八日には､「浄土宗災害対策規程」に基づき、十八日に災害対策本部をいち早く宗務庁内に設置。宗内寺院の被災状況の把握に努めるとともに、緊急措置として、十九日には総本山知恩院と共同で救援物資を西宮市役所に届けたほか、二十一日には兵庫教区に設置された同教区災害対策本部（尼崎市・東光寺内）の要請を受けて宗務庁職員らがポリタンク二百個を同対策本部に届けた。また二十三日には宗務庁と知恩院が、百万円の義捐金を兵庫県対策本部に届けるなど、緊急支援活動を展開した。

同日の地震対策会議では、地震の被害が予想以上に大きな広がりを見せていることから､「災害対策規程」に基づき、総額三億円を目標に救援義捐金の募金活動を展開することを決め、同日付で各教区長宛てに依頼状を発送することを明らかにした。同宗では、一応の目安として三月三十一日までに一ヵ寺三万円以上の募金をお願いしたいとし、寄せられた募金は兵庫教区災害対策本部を通じて被災寺院（檀信徒を含む）に見舞金として送る、としている。

また、対社会的救援として特別会計積立金から一千万円を拠出、兵庫県災害対策本部を通じて被災者に送ることも決めた。

一方、被災寺院の中・長期的な救援策としては､「寺院災害特別互助規程」に基づき、三月の定期宗議会に規程の改正も含めて被災寺院の復興に関する施策を提案するとともに、被災寺院に対する一宗課金の免除を図る方向で検討したいとしている。また、同宗が独自に設けている「共済制度」による給付については、各寺院の実態調査を実施し、共済委員会の審議をまって共済給付金を給付することにしている。

このほか、宗務庁と総本山知恩院の協議で、兵庫教区災害対策本部の要請によっては職員の派遣も検討、すでにボランティア活動を展開している近畿ブロック浄土宗青年会にも人的派遣の要請を行なうほか、浄土門主名による被災寺院宛てのポスター形式の見舞状の送付、浄土門主の御親教による犠牲者の追悼回願、総・大本山の避難所としての開放、などの救援策を実施したいとしている。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)

『中外日報』平成７年１月31日付（25260号）18面

兵庫県南部地震

被災児童生徒に学用品を

日本書道文化研究所呼び掛け

日本書道文化研究所（加藤達成所長、京都市南区）では、今なお避難民の生活を余儀なくされている兵庫県南部地震の被災者に対して、児童生徒に学用品を送ろうと救援活動に立ち上がった。

加藤所長と夫人は、取りあえず救援募金の托鉢を行ない、特に焼け出された小・中学生のために、業者に呼びかけて、墨、紙、筆などの学用品を集めた。

そして二十八日には加藤所長の自坊（浄土宗極楽寺）がある京都府綴喜郡田辺町の近鉄・新田辺駅前で夫妻で救援募金活動を行なった。

また、三十一日には京都の佛教大学四条センターのある四条烏丸でセンター職員の応援を得て募金を行なう。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)

『中外日報』平成７年１月31日付（25260号）18面

展望'95年

平成大修理が本格化

七十周年　転機迎える金剛流詠歌

高野山真言宗

五月末の宗議選にも地震の影響

今年は総本山金剛峯寺の整備計画、いわゆる「高野山平成の大修理」が二年目に入り、勧募および桧皮集めが本格化する。大主殿、奥書院、経蔵、鐘楼堂、山門、会下門、かご塀並びに大師教会本部大講堂の桧皮葺き屋根替えと、根本大塔の塗り替えを行なう事業で、総事業費を十八億三千万円で見積もっている。

今回の兵庫県南部地震により、宗団の寺院や檀信徒が甚大な被害を蒙り、被災者および寺院復興資金のため社会福祉基金から二億円を取り崩す緊急的措置が取られるなど、本山整備計画も多少の変更を余儀なくされよう。新居祐政宗務総長の自坊・光明院（神戸市兵庫区）も倒壊したが、整備事業に対しては完遂への自信を語っていた。今年を整備事業の寄金固めの重要な年と位置づけているようだ。

震災のため、太融寺（大阪市北区）から「ホテル南海」へと場所を変更せざるをえなかったのが三十日の布教研究所の会議。この席上、新たな詠歌が発表された。この曲は四月十三、十四日に執り行なわれる金剛講七十周年大会で奉詠される。教学部によると、この七十周年大会は金剛流詠歌にとって大きな転機にしたいようだ。「宗祖・弘法大師は宗派を超えた存在にもかかわらず、詠歌は大衆に広がっていないのが現状」と指摘する声があるのも事実である。

そこで、今回の新たな詠歌の創作や「新しい宗教音楽」のための作詞の一般公募および一流作曲家への作曲依頼を企画している。新しい宗教音楽はこれまでの詠歌の枠にとらわれないものを目指しており、来年の関東で開催予定の高野山真言宗大会で大々的に発表するという。それと同時に、全国六大都市でこの曲を中心に金剛流詠歌と宗教舞踊、華道高野山などを融合して、“立体曼陀羅”を作っていくとしている。一般大衆へのアピールがねらいだが、具体的な詰めはこれから。

金剛講七十周年大会は、高野山上のあらゆる諸堂を開けはなって灯明等で荘厳して、山上を“密厳浄土”にするという大がかりな企画が進められている。関東における高野山真言宗大会については、開催地や具体的な内容、動員について今年のうちに決定される見込みである。

今年はまた、宗会議員の選挙の年でもある。任期満了が五月いっぱいのため三月の宗会が済んでから本格的な動きが始まるが、ほとんどの選挙区ですでに水面下での動きが伝えられている。一番の焦点だった第七区（兵庫県）では目立った動きが見られていたが、今回の震災による影響は大きいだろう。

他の選挙区について、話し合いでなく五月末の選挙までもつれそうだと言われるのは第三区（新潟県、富山県、石川県、福井県）や第九区（徳島県、香川県、愛媛県、高知県）など。これらの選挙区にしても、震災により静観せざるをえなくなった。

今回の震災はこうして宗団にとっても至るところで、影響を与えている。前回の臨宗で採用が決定された共済年金制度についても、地震を含めた天災による被害を蒙った場合、寺院の復興を資金的にどうすればよいのかが問題になっているだけに、三月の宗会ではその点も論議されるだろう。

五月二十一日に予定している中国・赤岸鎮の空海大師紀念堂の一周年を記念した団参についても、震災のため募集がストップされていた。再開されたというので、予定通り行なわれるであろう。他に海外の関係では、スリラン

カで国際交流センターが中心となり建設が進められている幼稚園と保育園が四月中にも完成する。
　四月二十六日の稲葉義猛管長の晋山式は予定通り執り行なわれる。
　最後にやはり震災についてだが、太融寺に本部が置かれている救援のためのボランティア活動はまだまだ全国の各寺に認識が徹底していないようで、支所によっても取り組み方に違いがあり、今後は一部の人たちに掛かる負担が大きくなっていく可能性がある。本部ではできるだけ多くの人に長期的かつ継続的な参加を呼びかけており、宗団あげて取り組める態勢が早急に望まれる。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)